

する時は五・六日も懸り小繪圖出來仕也。渡邊伊兵衛罷出で、左様に仕りては大きき手間入り六ヶ數帳なり。此御天守臺地に寫し、繩張可仕、御好有之時は如何やうにも右の地に寫したる繩の上にて御好可被成と申しけり。幕府御大工共、尤もさうには聞ゆれども、爾と合点參らずと申す。さらば私可仕、御好被成よとて、此方より召連罷出づる大工共に申付け、則元の御天守臺を地に寫し、繩張仕り、御好可被成とて見せたり。幕府の御大工共借も聞えたる儀也。是に六尺ひき、時は恰好如此たるべしとて、又繩張直し見るにより、一日の内に恰好の繩張極めて、御指圖極りたり。此時渡邊伊兵衛水廻、上の御大工ども感じ入りて名を揚げたりけりと。又山本基庸の微妙公夜話録に云ふ。天守臺出來之節、幕府御大工頭鈴木修理申すは、臺にひすみ有之やうに見ゆるよし申す處に、此方の御大工渡邊伊兵衛かねを持出で、かねの手を合せ見せ、是御覽候へ、分厘も違不申由爲見候へば、一段能く候。見違へたる由申聞け、御奉行中にも宜きよし被申たり。其段御聽に達しけるに、利常卿、伊兵衛めちいさきやつに候へども、大男の三

人懸も仕りたり。何ぞとらせと御意にて、大分被下物有之候由、不破平左衛門咄承る。とありて、此の普請役の時、渡邊伊兵衛幕府の諸役人へ對し、吾が藩の越度なき實意をあらはし、己が力量を知らしめたる事知られけり。又山本基庸が夜話録に、利常卿小松にて作事被命、山本瀬兵衛作事方横目にて罷出でける處、利常卿御出で作事方御覽ありしに、天井縁下ほそく幼稚也とて、御大工渡邊伊兵衛を殊の外御叱被遊、天井を下より御自身御つき破り、是皆打こはせと被仰ゆゑ、はつと申しかけ上り、材木のきれを以て棚のつりて有之をも微塵に打破りければ、はあくくと被仰、こはし不申所と相見ぬ、其儘被爲入たり。扱々不興成る事、疎忽千萬と何れも申し迷惑至極仕り、御次へ罷出で品川左門を待ちて罷在、逢候て、只今御供被成、御覽の通り倉相成仕り迷惑仕由、何分にも宜しく頼入候旨申入。左門被申、此間御好みにて、出來宜しき由被仰たる棚也。不興成事也。去りながら被爲入ける時分、瀬兵衛めが棚を微塵に致したり。あのやうな事はしからぬがよし。若きやつは火の中へも飛入るやうに仕立てねば、關敷時に用

にたゝぬと御意被成たり。御叱りは被遊間敷由被申聞と、瀬兵衛咄申。との一話をも載せたり。渡邊伊兵衛が事にあらずといへども、利常卿小松在城し給ふ頃、作事向を伊兵衛に被命たる考證に記載す。

○鐵炮町

大工町の横小路なり。今池田町に屬せり。故に今は池田町一番丁・池田町二番丁と呼べり。一番丁は、舊藩中先手組鐵炮足輕の組地也。二番丁は、割場附の組地と成り居りしかど、元は一番丁・二番丁共に先手組足輕の組地なりしとぞ。萬治二年十一月の居屋敷歩數定書に、五拾歩御鐵炮之者其外掃除坊主御餌指。とありて、御鐵炮之者といふは、先手足輕鐵炮組の惣稱なり。故に此の組地をばひかしより鐵炮町と呼べり。

○鐵炮足輕事略

藩國官職通考に云ふ。加藩國初は先手大組・中組等の名目もなければ、總て其の頭をば足輕頭と稱し、其組足輕をも弓之者・鐵炮之者と呼べり。按ずるに、甲州武田家には足輕大將と云ひ、關東番き諸侯家にては多く足輕頭を者頭とい

ひ、關西にては物頭と書けりといふ。其の唱へ同じうして文字違へり。吾が藩は織田家の下風立なりしゆゑに、物頭と書けり。然るを鐵炮之者・弓之者を預る頭なるを、物頭と書ける事理なしと云ふ説あり。予深く考ふるに、武田家など與力幾十騎・同心何十人預る。其他も足輕何十人預るとあり。是人を以てするが故に兵器は是に次げり。因りて者頭と云ふ。吾が藩は大組・中組を始め弓・鐵炮若干にして、其持つ者幾十人・手替幾人添へて、其器を預けらるゝ例也。故に器を先とし、品物の頭なるを以て物頭といへり。但し其の頭の濫觴は詳かならず。藩祖高德公、天正十二年に千福長左衛門義春を鐵炮頭に命ぜられ、足輕二十人を預けらる。是姓名の顯るゝ始めならんか。此後は文祿元年に後藤又助仰付けらる。慶長五年菊池忠左衛門・大橋九郎兵衛・松平久兵衛等勤之。大聖寺役の時長如庵・高山南坊・山崎閑齋・木田但馬等の手へ足輕頭を附けらるゝ事見ゆと。平次按ずるに、利家卿の時鐵炮足輕を抱えられし事は、先筒足輕組の人々の由緒帳に、高德公於越前府中、御鐵炮之者五拾人外小頭五人、都合五拾五人被召抱、小塚藤右衛門に御